

「荒海や・・・」を推理する

池田 隆

「荒海や佐渡によこたふ天の河」は壮大な光景を詠んだ芭蕉の名句である。ところが『奥の細道』越後路の箇所には本句ともう一句のみで、「暑湿の労に神なやまし、病おこりて事を記さず」と状況説明が全くない。尤も芭蕉もやや気が咎めたのか、後に俳文『銀河の序』で「銀河の煌く空の下で流人に思いを馳せつつ佐渡を出雲崎から眺めた」などと述べ、この句を再掲している。

この度「奥の細道」の越後路を辿るにあたり、この名句が生まれたときの状況を調べてみた。

同行者の曾良の旅日記には日時、天候、通過地、宿、出会った人などが細かく記されている。越後路では宿泊に難儀して不愉快な思いをしている。しかし芭蕉が体調を崩したという記載はない。出雲崎に泊まった旧暦七月四日の夜は強い雨だったようだ。また芭蕉没後に出た門人の考証記録『奥細道菅菰抄』には新潟で詠んだ句「海に降る雨や恋しき浮身宿」が載っている。

夏の日本海は穏やかで荒海ではない。また越後路から見て銀河は佐渡の方角には横たわらない。したがってこの名句は実景描写ではなく、七夕の日に行われる句会に向けて、予め作った心象句で虚構の風景であると多くの識者が述べている。

夜中に起きて自らも確かめようと出雲崎の宿の窓から眺めてみた。そこには北斗七星が煌き、漁火が灯り、水平線に沿って佐渡の黒いシルエットが静かに細長く横たわっている。たしかに芭蕉が詠んでいる情景とは全く違う。

芭蕉の頭のなかでこの虚構の名句がどの様にして生まれたのだろうか。布団に戻り推理してみた。

上五は荒れる冬の日本海の話聞き、佐渡の厳しさを強調するためだろう。下五は先に渡った大河（佐渡に向って流れ出る信濃川）からの連想で七夕の句会向け。中七は当初「よこたふ佐渡に」としたが、敢えて語順を変え佐渡への強い思いを表したのか。

『奥の細道』越後路での俳文省略は名句を強く印象づける手法だろう。いや虚構を伏せたいため？

「そろそろ眠くなった、お休み」